

やさしい アート



やさしい美術プロジェクトは病院と協働で「やすらぎのある快適な医療空間」を模索し創出する、学生主体の活動です。

大地の芸術祭 開催

特集1 人と人をつなぐ

P2・3 大地の芸術祭と
やさしい美術プロジェクト
<後編>

特集2 やさしい美術
プロジェクトと病院の歩み

P4 ~足助病院と十日町病院~

2009年7月26日～9月13日、越後妻有地域(新潟県十日町市+津南町)にて大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009が開催され、本プロジェクトは新潟県立十日町病院を中心に活動を展開しました。

今回の大地の芸術祭へ向けた活動は2007年秋、現地調査で前回(2006年)のトリエンナーレ参加アーティストの作品見学から始まり、この時メンバーの多くは初めて越後妻有地域を訪れました。

2008年に入ると、地域住民の皆さんに教わりながら、雪掘り・田植え・稲刈りを体験し、妻有の自然にふれました。これらの現地調査と様々な労働体験の中で、妻有の土地が持つ強いエネルギーに感銘を受けるメンバーも多く、様々な体験思いは少しづつ蓄積され、作品制作への原動力となっていました。

また、同年秋には十日町病院との研究会が本格的に始まり、より具体的な作品企画について話し合うようになりました。病院とプロジェクトをつなぐ「やさしい家」となる空き家の整備も始まる、大地の芸術祭に向けた活動がより現実味を増していきました。

大地の芸術祭の会期が近づくと、試作品による検討と作品の展示が始まり、設置作業や調査のため多くのメンバーが病院を訪れました。やさしい家や病院での最終的な準備作業は大地の芸術祭開催日直前まで行われました。

こうした長い準備期間の末、大地の芸術祭でのやさしい美術プロジェクトの活動が展開されました。舞台となる地域が変わってもプロジェクトが実際に作品を展開するまでの経緯は、何ら変わることなく進められてきています。

(文・竹中 仁美)

人と人をつなぐ

大地の芸術祭とやさしい美術プロジェクト（後編）

大地の芸術祭開催中、やさしい美術プロジェクトの十日町病院での活動は、非公開で展開されました。さらに、十日町病院から徒歩約3分、病棟から見える位置にある「やさしい家」では、関連作品も展示され、病院と「やさしい家」を「つなぐ」活動も行われました。

実際に院内ではどのような作品が展開されたのか、学生作品を中心にご紹介します。

光と風の天がい

作者 市川 沙那恵
展示場所 授乳室



お母さんと赤ちゃんの大切なコミュニケーションの場である授乳室に展示された、風に揺れ、光でやすらぎを与える天がいの作品。お母さんと赤ちゃんの気持ちをより近づけてくれる特別な空間を創り出しました。

こんなちは、妻有。

作者 浅野 瑠璃子
展示場所 リハビリテーション科内壁面



会期中地域の方々とお話しし、関係を紡ぎながら制作した連作型の絵画作品。人々の生活の様子を反映させ表現した絵は日々増えていました。

Color of water

作者 川島 健嗣
展示場所 薬局待合 他

妻有地域に降り注ぐ強くはっきりした光と、そこに流れる澄んだ美しい水をレンズを通して見つめ続けた映像作品です。夜間には「やさしい家」の2階南側窓に上映し、入院患者さんにも鑑賞していただきました。



十日町病院

足助アサガオのお嫁入り

作者 赤塚 ベッキヰ
展示場所 中央入口/2F屋上 他



足助病院リハビリテーション科で、患者さんと職員さんに大切に育てられたアサガオを新潟県立十日町病院でも咲かせよう、という「つながり」を育む作品です。アサガオが地域も経営母体も異なる両病院をつなぎ、交流と連携が生まれています。

110人の微笑む肖像画

作者 河合 正嗣
展示場所 外来待合



足助病院の患者さんや看護師さん、医師をモデルとし、人々の笑顔を鉛筆のみで繊細に描いた絵画作品。シリーズ53点を日替わりで展示しました。（企画・招待作品）

えんがわ画廊-妻有

十日町病院の病室およそ70カ所に備え付けられた表示灯に、小さな縁を設けたミニギャラリー。（企画・作者 泉麻衣子）

「やさしい家」の縁側では「えんがわ画廊-はなれ」が設けられ、院内に展示された作品に出会うことができました。



おてだまやさい

作者 柴田 さゆり
数種類の野菜・果物の皮の写真を布にプリントし、その布を丸めて「お手玉」にした立体作品。野菜とお手玉、ごく普通の身近なもの同士を合わせることによって生まれた味わい深さを、見るだけなく直接手に取り、遊んで楽しめる作品。



きもちのきのみ

作者 水野 望
展示場所 中央入口



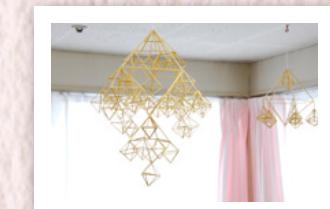
十日町病院と「やさしい家」で、木のオブジェに実ったハート形の風船を手わたすイベント。「心に実ったやさしいきもち」の風船にのせ、町中にやさしいこころを増やそうという活動でした。

むかし、むかし、あるところに

作者 天野 入華
展示場所 食堂、外来各待合 他

越後妻有地域の昔話などをもとに制作した手作りの絵本作品。豊かな自然のなかで生まれた、暖かみのある不思議な世界が描かれました。

「やさしい家」では、絵本の世界のワンシーンを陶人形により立体的に再現されました。



HIMMELI

作者 岡村 香
展示場所 談話室天井
十日町病院と「やさしい家」でワークショップを開催し、スタッフと一緒に制作したヒンメリが展示されました。ヒンメリとは、藁を使用したモビールで、翌年の豊穣を祈り「幸せを呼ぶ力」があると言われています。



ちよだより

発達センターちよだと協働で行ってきた作品制作体験。「ちよだより」では毎回子どもたちの様子や完成した作品を紹介してきました。今回は今まで触れる機会の少なかった、実際に子どもたちが抱える「発達障害」や「自閉症」についてお伝えします。

発達障がいの多くは先天性のものであり、他人の気持ちを読みとり、認識することを司る脳内神経回路の機能不全によりおきます。それによつて受胎からおおむね18歳くらいまでの間に、運動や精神発達、感情面の情緒発達において遅れや疾患が見られます。

発達障がいは「精神遅滞」や「知的障がい」などを含む、多くの障がいの総称です。その中でも今回、私たちが制作体験で関わっている子どもたちに多く見られた「自閉症」を取りあげます。

「発達障がい」とは



本先生は、大変残念なことにやさしい美術プロジェクト創設の前年度に病氣で亡くなられました。その後、高橋准教授（やさしい美術プロジェクトディレクター。以降ディレクター・高橋）は、相次ぐ親しい人の死や自身の入院などの体験から兼ねてより「病院」という場所について思う所があり、山本先生の親友である坪井勝人教授と共に足助病院を訪れたのです。

初めてお会いしたその席で「病院の中へ美術とデザインで何かできないでしょうか」とディレクター・高橋から「やさしい美術」の企画概要を提案したところ、すぐに早川院長から「足助病院はコミュニティの場。やつてみましょう。」と思ひもよらない嬉しい返事をいただきました。義弟を亡くされた早川院長は自身も大病を患つたことが

やさしい美術 プロジェクトと病院の歩み

～足助病院と十日町病院～

やさしい美術プロジェクトが活動を開始した二〇〇二年以来、協働と研究が続いている足助病院。大地の芸術祭を通して交流が深まつた、十日町病院。その他にも活動の場を広げているやさしい美術プロジェクトですが、全ての始まりである足助病院について語るには、足助病院早川院長の義弟であり名古屋造形芸術短期大学で非常勤講師をつとめていた山本英行先生を欠かすことはできません。山本先生は、大変残念なことにやさしい美術プロジェクト創設の前年度に病氣で亡くなられました。その後、高橋准教授（やさしい美術プロジェクトディレクター・高橋）は、相次ぐ親しい人の死や自身の入院などの体験から兼ねてより「病院」という場所について思う所があり、山本先生の親友である坪井勝人教授と共に足助病院を訪れたのです。

その四年後、大地の芸術祭に二〇〇三年から出品している名古屋造形大学の陶芸室工房職員の渡辺泰幸さんから、「大地の芸術祭が作品プランを募集しているから、出してみたらどうか」という勧めがあり、プランを提出してみたところ、大地の芸術祭総合ディレクターの北川フラン氏より「是非取り組みましょう!」という連絡をいただきました。そしてやさしい美術プロジェクトのプランを見ていただた十日町市周辺のいくつかの病院の中で、十日町病院が興味を示されたのです。

初めて十日町病院を説明に伺った際には、院内の繊細な日常を脇かすことにもなりかねない事情から、大地の芸術祭での一般公開に関して多くの質問や疑問が挙がりました。しかし「病院を美術館のようにするのではなくて、十日町病院が興味を示されたのです。

具体的には目を合わせない、言葉関係障がい」「コミュニケーション障がい」「想像力の欠如」などがあげられます。しかし社会の中で認知度の低い障がいであるため、社会の中で差別を受けたり偏見の目にさらされることも少なくありません。

振り返つてみると必然のようにも感じる、偶然の巡り会いと契機が重なり、つながり広がってきた関係の糸。その中で生まれている大きな可能性。こうした確かな基礎の上に、より深く親密な協働関係を目指してやさしい美術プロジェクトは今も歩み続けています。

（文・張祐寿）



自閉症の主な症例として、「対人関係障がい」「コミュニケーション障がい」「想像力の欠如」などがあげられます。

具体的には目を合わせない、言葉が一方的・反復的、習慣や儀式的な行動へのこだわりなどの症例が見られます。しかし社会の中で認知度の低い障がいであるため、社会の中で差別を受けたり偏見の目にさらされることも少なくありません。

「コミュニケーションの手段は、一つだけじゃない。こちらが限定された方法を押しつけるのではなく、その子が持っている得意な方法に即して接することで、コミュニケーションは成り立ちます。」と発達センターちよだの職員さんは言います。

一度聞いた歌をすぐに覚える子、体を動かして表現するのが上手な子など、得意なことが異なる様々な子どもがいます。こちらから歩み寄り接することで障がいという枠を超えて、人の人同士として心を通わせることができます。

（文・浅野 瑞穂子）

アマノのひとこと コトバノツブ

「コトバノツブ」は、足助病院薬局前に設置された天野入華おすすめの文章を病院利用者様が自由に持ち帰られる作品です。

運命の船を漕ぎ 波は次から次へと私達を襲うけど
それも素敵な旅ね どれも素敵な旅ね

Rie fu(シンガーソングライター)
「Life is Like a Boat」より



アマノのコメント

私は旅行が好きです。今まで自分が知らないものを見に行くことは少し勇気のいることですが、素敵のことだと思います。そんな時に思いだす言葉を選びました。

く、患者さんのために出来る事を病院と相談して行う」というやさしい美術の姿勢を示し、大地の芸術祭初の「非公開」作品として活動を展開しました。芸術に対して理解のある十日町病院の塚田院長からは「病院内にイメージを立てて絵を描いている人がいてもいいのでは。」という言葉もいだつき、背中を押されるように活動が盛り上がりつていきました。



vol.12 大山三雪さん
(看護部長)
推薦者

「自 分の体の痛いところと同じ部分を撫でお祈りしてくれる」という賓頭尊者さん(おびんずるさん)は全国各地の觀光名所にある有名な像ですが、足助町にも存在しています。

足助大橋からほど近く、旧足助町域の新町に「普光寺」というお寺があります。大山さんはこのお寺の隣にお住まい、毎朝猫の散歩でお寺の境内を歩く時におびんず

るさんの前を通るのだそうです。いつからそこにあるのか地元の人さえも定かではありませんが、足助の木造のおびんずるさんは風化防止に施された塗装がひび割れおり、かなりの年月を感じることができます。一方でおでこや肩、指先などはつややかな光沢で、訪れた人々がよく撫でて磨かれた様子がうかがえます。

普光寺は現在無人のお寺ですが、近所の人々が花を植えたり掃



除をし、自主的に管理されているそうです。寺の奥には「やすらぎの小径」と呼ばれる山道が続き、その先では無数のお地蔵さんと生い茂る緑が迎えてくれます。

暑さが和らぎ、足助の町が紅葉でにぎやかに彩られる季節となりました。行楽の秋、足助観光の際には足助の古い町を訪れ、人々に親しまれるこのおびんずるさんを尋ねてみるのも一興かもしれません。

(文・竹中仁美)



早川院長の一句

コミュニケーションは信頼から。
相手を信頼、
そして自分の情報公開。

ナースステーション前を彩る折り紙のあじさい。
ナースステーション前を彩る折り紙のあじさい。



院内散歩



「院内装飾」 折り紙の花、画用紙を切り張りして作られた鳥。病院内を歩いているとそうした飾りに出会い、心が和まされることがあります。

今回は「院内装飾」と題し、B棟一階の装飾制作を担当している職員さんにお話を聞きました。

「院内装飾」は職員さんがアイデアを出し合って制作しています。長期入院で外へ出る機会の少ない患者さんに季節を感じてもうらう他、患者さんと一緒に作ることで職員さんとの関係づくりになれば、と始めました。制作上、こだわりの一つは「大きく、誰が見てもわかりやすいこと」。対象を高齢の方にも配慮した装飾作りを心がけているそうです。車イス

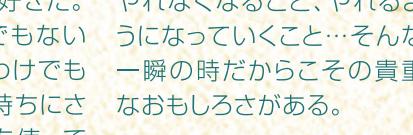
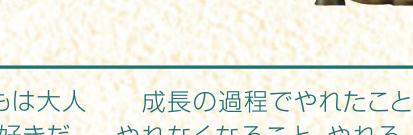
の患者さんと一緒に廊下を移動する時には「各装飾のところを周つて欲しい」という要望をもらうなど、装飾によって新たな会話も生まれています。

皆さんも院内装飾を見かけたら、職員さんに感想を伝えてみてください。そこでまた新たなコミュニケーションが生まれるのではないかでしょうか。(文・浅野瑠璃子)



今まで「ヤサビのイト」の取材で訪れた足助地区の様々な場所を中心、地図を作成。あちこちに存在する足助の名スポットをまとめてお届けします!

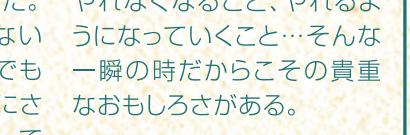
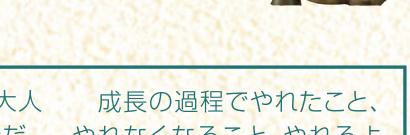
(編集・張祐寿)



ぶらりみちゆく足助旅

第九回 足助地図

木々の間から漏れる光を浴びて、神秘的な表情を見せる日吉神社本堂。



町中アート 発見!!

Vol.012

小さなアーティスト

テキスト: 中川れな



服をかぶっておどけたり、顔中にシールを貼ってみたり…。子どもは大人が予期せぬ行動をする。子どもは大人の反応を楽しむ事が好きだ。

誰が教えたわけでもないし、真似をしているわけでもない。人を楽しい気持ちにさせる天才、自らの体を使って表現するパフォーマー。

私の姪はまだまだことばも身体も未熟な2歳児だが、そんな彼女がやるパフォーマンスには驚かされる。



やさしい美術 からの おしらせ

絵はがき募集!!

やさしい美術プロジェクトでは、足助病院の患者さんが使用する絵はがきフレーム付きマルチボックス「私の美術館」に届ける絵はがきを募集しています!



【募集要項】 はがきサイズ 縦100mm×横148mm

※横書きのみの募集となります。

※作品は返却されません。

※患者さんへの配慮により、選定する場合もあります。

※作品を刊行物などの資料に掲載する場合もあります。

絵はがき制作プログラム開催

【日時】2009年10月10日(土)～12日(月)

10:00～17:00(予定)

【会場】名古屋造形大学キャンパス(大学内芸術祭と同時開催)

※入場無料・予約不要です。皆様のご参加をお待ちしております。

サイトが新しくなりました

やさしい美術プロジェクトの公式サイトが新しくなりました。

作品の搬入や研究会などの活動状況、ワークショップなどのイベント情報も公開中です。ぜひご覧下さい。

やさしい美術HP <http://gp.nzu.ac.jp>

お問い合わせ

情報誌『ヤサビのイト』に関するご意見・ご感想などをお聞かせください。下記連絡先にてお待ちしております。

リーダー川島の
ヤサビのウラ



展示作業中、偶然作品のような写真が撮れました。
活動の最中にも何かが生まれていることを感じます。

[連絡先]名古屋造形大学 やさしい美術プロジェクト「ヤサビのイト」係
〒485-8563 愛知県小牧市大草年上坂6004
TEL 0568-79-1111(代) FAX 0568-79-1070
URL <http://gp.nzu.ac.jp> MAIL gpnews@nzu.ac.jp
[協力]足助病院/足助町の皆さん/ディサービスちよだ
大地の芸術祭実行委員会

妻有石井伊參己行



8月11日 名前 水野 姉
月11日 名前 水野 姉
やさしい美術祭に参加し、
大塚の芸術祭に参加し、
い家のスタッフとして滞在して、
やさしい美術の展示を見学し、
所からいたたきものや
に触や警門でござる。二近
数日間、たくさんの人のやさしさ
に感動して、また、おもてなしのや
いから来ていたたがいに来
訪者の方のあたたかいご
遠くから来ていたたがいに来
家でした。やさしい家に、か
支撐：やさしい家に、か
さしおがたくせん、あつま
家でした。



『ヤサビのイト』再びデザインリニューアルです!学生の私が、こうしたかたちで多くの皆さんの目に触れる新聞の制作に関わらせていただけた、その有り難みと責任を、改めて実感する機会となりました。今後ともよろしくお願いいたします。(竹中)

十日町病院との協働が始まった頃、プロジェクト初の参加型作品も考案・実施されました。作品や企画を通して関係を築くことを目的とする参加型作品は、今ではやさしい美術プロジェクトでの企画の定番となり、築いた関係は大きな財産になっています。(張)

[発行]名古屋造形大学 平成19年度 文部科学省 現代GP選定事業

やさしい美術プロジェクト

[ヤサビのイト編集部]

浅野 瑠璃子(視覚伝達D・3年) 竹中 仁美(情報D・3年)

張 祐寿(メディア造形・3年) 井口 弥香(ディレクター)

第12号(奇数月第3曜日発行)